モンゴル 2009

野生動物学研究室教授　高槻 成紀

背景など

私は 2002 年からモンゴルに通っている。調査内容や体制などにいくつかの変化があったが、麻布大学に来てからは 3 年生を連れていくことにした。これにはいくつかの意味を含ませた。ひとつは「研究は実験室でおこなうもの」という考えが抜けない麻布大学に、そればかりではないことを知ってもらうこと、「とくに学生は学外にでないもの」という本学の常識を改めてもらうことで、それを言葉で説得するのではなく、「実力行使」をすべきだと考えたからである。これらは大学あてのことだが、学生自身にとっても、若いときに海外体験をすることはとてもよいことだと思うからである。それも修学旅行やパック旅行ではなく、動植物の調査をするという特異な体験は必ずプラスになるという確信があるからだ。それに加えて、モンゴルという国の特殊性がある。私はいまの日本社会の良さと悪さを考えるとき、その比較対象としてモンゴルが実に有効な対象だと思っている。乾燥と湿潤、狭隘と広大だけではない。自然と身近な暮らしと隔離した暮らし、緻密と大ざっぱ。忙しさとのんびりさ、そして身勝手と思いやりなどが対照的なので、モンゴルにいると自分があたりまえだと思っていることが、そうではないことを気づくからである。

一昨年は立脇君一人だったから、彼もつらいことがあったようだ。去年は獣医学科の 4 人で、個性派揃いなのでおもしろいといえばおもしろい体験をした。問題もあったが、実習としては成功だったと思う。そして今年は 3 年目となり、以下の 4 人が参加した。

大津綾野：麻布大学 3 年生。タヒにあこがれて参加。

坂本有加：麻布大学 3 年生。タヌキの調査をしているので、肉食獣の調査ができそうというので参加。

藤本彩乃：麻布大学 3 年生。肉食獣の食性を卒論とするので参加。

宗兼明香：麻布大学 3 年生。昆虫と鳥に興味があり参加。

調査内容は大きく分けて２つ、具体的には４つあった。

ブルガンでは牧民のゲルに泊まり、モンゴルの生活をしながら、訪花昆虫と糞虫の調査をした。いずれも放牧圧の違う場所での昆虫を比較するもので、放牧と草原の生物多様性の関係を解明するものである。このテーマは花と昆虫、家畜の糞と甲虫という種間関係を群集レベルで捉えようとする意味で、また人の営みと草原の保全という応用的な意味で価値が高いと思う。去年調査したのは 8 月の中下旬だったために、雪が降るという思いがけないこともあったので、今年は上旬に照準をあわせてリベンジを試みた。

フスタイ国立公園では、順調に回復しているタヒ（野生馬）の増えすぎの問題を予測し、アカシカとの種間関係に取り組みたいと思った。またオオカミ、キツネ、オオヤマネコ、

猛禽類などが生息することを知っていたので、これらを「肉食ギルド」としてとらえ、その比較を通じてギルドの解明を試みたいと思った。そのために地元やモンゴル国立大学との協力体制を整えた。

調査には帯広畜産大学の佐藤雅俊氏に全行程をいっしょにすごしてもらい、立正大学の須田知樹氏にフスタイの後半を共有してもらった。二人とも東北大学の後輩あるは指導学生であり、長いつきあいである。

モンゴル行き

学生の事情もあり、日程は成田の往復で 15 日、移動に時間がかかるから実質 10 日ほどであり、所期の内容をこなすのはかなりのハードワークが予想された。しかし一年間の調査をここに集約するのだから、手抜きをするわけにはいかなかった。学生ははじめてのモンゴルで緊張もするだろうし、過去 2 年の経験から体調を崩すことも予想された。現に消化器系に不安があると言っている学生もいた。したがって、強行軍ではあるが、学生の体調もながめながら、臨機応変に対応しなければなるまいと覚悟していた。

ブルガン

ブルガンはモンゴルの北部にあり、ウランバートルからは 7, 8 時間かかる。チョロンさんという牧民の人のゲルにお世話になりながら調査をするので、いわばモンゴル生活が体験できる。今年は女子学生が 4 人ということで、冬営地に使う小屋を開放してもらった。私と佐藤氏もそこに泊まれということだったが、それは遠慮し、ゲルを使わせてもらった。チョロンさんには別のゲルを使ってもらうことになり、申し訳なかった。

学生はウランバートルに着いたときから、乾いた空気に異国感を感じていたようだが、ここでの生活はさらに気に入ったようだった。出てくる料理は決しておいしいとはいえないと思うのだが、彼女らはしたづつみを打っていた。濃厚な肉料理は日本人の消化器には負担が大きいので、控えめにするようにアドバイスしたのだが、結果的には、初めは慎重だったものの、徐々に大胆になって、おかわりもするようになり、そして腹痛もなくすんだので、私としてはほっとした。

チョロンさんの奥様はスレンさんという人で、休むことなくかいがいしく働く人だ。私がお茶を飲みたそうな顔をしていると、察して、「オス！」といってお湯を持ってきてくれる。忙しそうにしてはいるが、楽しげで、人に喜んでもらうことが無上の喜びだという雰囲気の人だ。独り言を言ったり、鼻歌を歌ったり、なんだかいつも楽しげだ。頼んだことはきちっとする人で、以前動物の骨を確保してくれるように頼んだら、すべてのリストを作ってモンゴルの名前、捕獲年月日をすべて教えてくれた。私が動物名を確認するためにスケッチをしたとき、シマリスとリスについて、「だめだめ、エゾリスのほうは耳がばさばさになっていないといけない」と指摘してくれた。ヒツジの糞のサンプルも、月ごとにすべてのデータを書いて、すべて同じ大きさにならべてきちっと箱に収めてくれていた。今回も最後の日に一言づつ印象を語るということになったとき、「ちょっと待って待って」といって、ノートをもってきた。何をするのか

と思ったら、「記録しておかなくちゃ」ということだった。そうした几帳面さと、どこかユーモラスなところがあいまって、学生いわく「かわいい」のだそうな。

スレンさんはお手伝いのトンガさんとともに料理を作ってくれた。乳製品もいろいろ作ってその原理を説明してくれるので、学生は興味津々のようだった。チョロンさんとの仲むつまじく、日本の男のように照れることなく、仲の良いところをみせてくれるので、感じがよかった。

チョロンさんはもと気象台長だったインテリの科学者なので、私の質問にも論理的に答える。今年は去年と違って冬営地に家畜が入っていたのでその理由を聞くと、しばらく黙っていたあとで「理由は３つ考えられる」というのに続けて、それぞれを説明してくれた。それでいておもしろい話をして人を笑わせるのが好きで、冗談をいっては学生を笑わせていた。

予想したとおり、調査はハードで、休む間がなかった。DJ（宗兼さん）が昆虫の担当だったが、彼女は体力がそうあるほうではないので、ようすをみていたが、かなり無理をして遅くまで整理をしてくれていた。訪花昆虫は歩きながら花にいる昆虫をみつけてカメラで撮影してメモを取るようにした。これを 1 日 3 回おこなう。昼はゲルにもどって昼食をとったが、あまり休むことなく次の作業の時間になった。糞虫の調査は朝、糞のあるところにいってウシとウマの糞を拾ってきてセットし、糞虫を回収するというもので、もちろん快適な作業とはほど遠い。

こうした作業を 4 人の学生諸君は気持ちよく進んでおこなってくれた。私は正直いって感心し、ありがたく思った。佐藤氏も同じ印象をもっていた。

こうしてあっというまのブルガン滞在が終わったが、その間、スレンさんが 4 人の学生にデール（モンゴルの民族衣装）を着せてくれ、別の日にはウマに乗せてくれた。デールを着せるときのスレンさんの表情は真剣で、民族衣装に対する誇りや、貴重だと感じる心がうかがえた。同時に若い娘に衣装を着させる女性のやさしさや喜びも伝わってきた。デールはひとつひとつ色や帯などが違ったが、それぞれに似合うというのがあるようだった。2 回目に着せたときも、4 人とも前のときと同じものだった。実際みなよく似合っていた。ウマにのった彼女らはほんとうに嬉しそうだったし、モンゴル人からすれば乗馬のぎこちなさがおかしかったのだろう、スレンさんたちは大笑いをしていた。実に楽しい時間だった。

デール姿の藤本、坂本、大津、宗兼

最後の日、一人一人が握手したが、その挨拶は儀礼的なものではなく、ほんとうに再会したいという心が感じられた。残念ながら日本でこういう別れを経験したことは長いことないように思う。こうしたことで、私は今の日本のことがよりよくわかるような気がする。

フスタイ

これにくらべるとフスタイは調査が中心となる。放牧が禁じられた国立公園の中にはマーモットがたくさんおり、フスタイ山頂ではタヒも、またアカシカさえも見ることができた。世界的な絶滅危惧種であるのに、あっけないような遭遇だった。タヒは手厚い保護のおかげで、人を見ても逃げることをしない。おかげで、私たちはその日も、翌日もタヒを間近で見るという贅沢を堪能することができた。

タヒとアカシカの種間関係は大津さんが担当することになっている。彼女は一人っ子のおっとりした性格で、体力があるほうでもなさそうだったので、どの程度任せたものかと見積もりがむつかしかったが、ブルガンで体調を崩すこともなく、モンゴルが気に入ったようすだったので、思い切って調査のだんどりを任せることにした。私としては、もし初日、任せてうまくいかないようだったら、対応を考えるつもりでいたが、上々のできであり、野外調査の結果も私の予想をみごとに裏付けるものだった。本人も大学でおこなう実習などとは全く違う感覚で責任をもち、細かいことまで質問をしてミスのないよう配慮していた。

もうひとつのテーマである肉食ギルドについては、藤本さんが担当することになっていた。半年前から公園側に糞の採集を依頼し、100 個以上が冷凍庫に保管されていた。彼女は体力もあり、しっかりしているという印象があったが、実際それは予想以上のものであった。ハードな毎日ではあったが、それを楽しんでいるようなフシさえあり、私も佐藤氏も舌をまいた。100 個以上の糞を瓶につめかえる作業はたいへんなことで、とくにモンゴル語で書いたラベルの読み取りが重要なので慎重におこなった。さいわい、国立大学のバイラ先生のお嬢さんが日本語が上手で、彼女が手伝ってくれたので、ずいぶん助かったらしい。私たちは別の仕事があったので、調査ステーションに一人で残したが、ちゃんと作業をしていた。

大津さんにしても藤本さんにしても、自分の研究のサンプルという自覚をもっていた。これは 2 年生までにはなかった意識であろうと思う。こうした体験を海外でしたということは彼女らを大いに成長させたのではないか。

特筆しておきたいのは、とくに自分の課題ではないにもかかわらず、坂本さんがいつでも調査隊全体のことを配慮し、体力ギリギリという状態にありながら、献身的に仲間の作業を手伝っていたことだ。

ブルガンでは私と坂本さんが訪花昆虫の調査をした。毎日 3 回の調査をしたことになる。100 メートルのベルトをゆっくりと歩き、私が言うことを彼女が記録した。美しい花の中で虫に集中しながらゆったりと時間が流れる。

実は私が麻布大学に来る前の 2006 年に、東大の教員として岩波ジュニア新書の「野生動物と共存できるか」を出版した。坂本さんは高校 3 年生のときに、この本を読んで、大学では野生動物を勉強しようと決心し、著者とは違う大学だが、野生動物が勉強できる大学として麻布大学を目指し、入学したところ、その著者が自分の大学の先生になっていて驚いたという人である。文字通り奇遇であるが、私は訪花昆虫の調査をしながら、ときどき空に浮かぶ雲をみて

「ああ、いま自分は坂本さんとモンゴルで調査をしているのだ」

とその不思議な縁のことを思わないではいられなかった。

記録をする坂本さん

ブルガン最後の夜に、ひとりづつ印象をいったとき、ふだんあまり口数の多くない坂本さんのことばを聞いて驚いた。

「高槻先生とモンゴルで調査をすることになるとは思いませんでしたよ」。

私が調査をしながら思っていたことと同じことを思っていたことを知った。

まとめ

おもに調査のことを書いたが、学生諸君は調査以外でもモンゴルという国、モンゴルの人々について思うところがあったようだ。こうしたことを振り返ると、学生諸君にとってこのモンゴル行はまちがいなくよい体験であったと思うし、私にとっても何度も体験したモンゴル調査のなかでも、忘れがたいものになった。彼女らの出し惜しみのないチームスピリットをうれしく、ありがたく思った。